



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第  
2号)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第2号). 泌尿器科紀要 1961, 7(2): 326-326

ISSUE DATE:

1961-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112079>

RIGHT:

## 編集後記

泌尿器科学の独立性に就ては従来から種々の機会に述べたが、茲に更に之に就て考えてみよう。斯学は性病科と同じではなく、皮膚科とは全く別である事、更に一般外科とも別の専門科目である事を、根気よく主張せねばならぬ。それは特に日本泌尿器科学会の責務である。大学にては講座を独立せねばならぬが、そのためには大学設置基準要綱の改正を達成し、殊に大学院設置にはこの事を必須条件とせねばならぬ。それには文部省、各大学等に働きかけ、また現在両科を兼ねていられる教授の協力も必要である。大学以外の大病院にても両科の分離が極めて望ましい。近來は両科とも診療範囲が広く深くなり、患者数も増しているが、更に分離の方が病院の資格も上がり、患者の信用も増し、担当医師にも熱意が湧くから患者も多くなり、収入も増すことになる。かくなれば泌尿科医の需要が増し、斯学を志さず者も多くなる。この際にも両科を兼ねていられる科長及び院長の理解を得られねばならぬ。このためには医師を増員せねばならぬ場合もあるが、実際には定足数を割っているのが殆どである。厚生省医務局の方針は、外来患者数を2.5（耳眼科は5）を以て除した数と、入院患者数との和が52であれば医師は3名要るのであるから医師を増すのは当然である。

学会は従来は両科合同にて開催されるものが多かったが、近頃は別々に開かれる傾向にある。地方会等に於ても両科の合同開催の意義は少なくなっている。医学雑誌にても両科を一緒にするのは適当でなくなつて来た。

近來の泌尿器科は昔のように淋疾を主な対象とするものでなく、高度な専門的伎倆を必要とするから、所謂専門医制度の方向に行くべきであらう。この専門医の数は内科等と異なつてあまり多くを必要とせず、その代りに高度の設備と伎倆を有する事が必要であらう。そうならば、従来のように皮科と泌科の看板をかけて簡単に個人開業するような事は実際に即しないものであり、どうしても充分な施設を備えた大学とか大病院とか総合病院で診療に従事するのが多くなる。そういう形態を希望する人が泌尿器科医を志さずことになるであらう。

### 購読要項

1. 発行は毎月（年12回）とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円、払込みは振替口座番号京都4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名（フリガナ）、住所（雑誌郵送先）、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

### 投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他。寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。  
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を附け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁 500円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集者が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。